

# 承空本『小野篁集』注釈の試み（4）

## ——稲荷詣での場面（1）——

松 野 彩

### 一、はじめに

『小野篁集』（別名『篁物語』）は小野篁（八〇二～八五二年）を主人公とした物語である。作者は未詳で、成立時期は説が分かれるが、筆者は平安後期（一一世紀末）～平安末期（一二世紀末）と推定される<sup>①</sup>。

この『小野篁集』の現存最古の写本である承空本<sup>②</sup>は、鎌倉時代後期に書写されたものだが、この写本を底本とした注釈書はこれまでに存在しない。そこで、筆者はこれまで、「承空本『小野篁集』注釈の試み（1）」<sup>③</sup>「篁と異母妹との出会い——」<sup>④</sup>「承空本『小野篁集』注釈の試み（2）」<sup>⑤</sup>「篁と異母妹の出会い（後半）・師走の月夜の場面——」<sup>⑥</sup>「承空本『小野篁集』注釈の試み（3）」<sup>⑦</sup>——漢籍教授に身が入らない篁の場面——<sup>⑧</sup>において、注釈・現代語訳を試みてきた。

本稿はそれに続く場面、篁の異母妹が京都郊外の伏見稲荷神社に参詣するさいに、篁が付き添う場面の冒頭部分について、注釈・現代語訳を試みる。

以下、本文、略記号一覧、注釈、現代語訳の順に提示する。

## 二、承空本・本文

以下の承空本『小野篁集』の校訂本文は、中村一夫「承空筆『小野篁集』による校訂本文作成の試み」<sup>(6)</sup>による。

- 1 さて、この女、願ありて、如月の初午に、稲荷に参りけり。供に人多くもあらで、
- 2 大人二人、童二人ぞありける。大人は色々の袷、二人は同じをなむ着たりける。
- 3 君は、綾の搔練の単襲、唐の薄物の桜色の細長着て、花染の綾の細長折りてぞ
- 4 着たりける。髪はうるはしくて、丈に一尺ばかり余りて、頭つきいと清けなり。
- 5 顔もあやしう世人には似ず、めでたうなむありける。男の童三四人、さてはこの
- 6 兄とぞありける。まほにはあらねど、先立ち遅れて来ける。詣でざまに困じ
- 7 なければ、兄いとほしがりて、「篁にかかり給へ」とて寄りければ、「いで、い
- 8 ないな」と言ひて、道中に居にけり。

## 三、略記号一覧

注釈を施すにあたって、以下の注釈書を参照・比較した。なお、注釈書は、初版の時期が古いものから順に並べた。

・注釈書

〔校註〕宮田和一郎著『校註簗物語 校註海人刈藻ほか』（爾保布廻園、一九三六年）、以下の（和泉）に所収。

〔新校〕宮田和一郎著『新校簗物語』（爾保布廻園、一九三六年）、以下の（和泉）に所収。

〔新釈〕宮田和一郎著『新校簗物語』（健文社、一九四八年）、以下の（和泉）に所収。

〔河出〕西尾光雄・秋山虔・池田彌三郎・松尾聰『現代語譯 日本文學全集 更級日記・平中物語・簗物語・堤中納言物語』（河出書房、一九五四年）

（朝日）山岸徳平校註『日本古典選 平中物語・和泉式部日記・簗物語』（朝日新聞社、一九五九年の新装版、一九七七年）

〔岩波〕遠藤嘉基・松尾聰校註『日本古典文学大系 簗物語 平中物語 濱松中納言物語』（岩波書店、一九六四年）

〔武蔵〕石原昭平・根本敬三・津本信博著『簗物語新講』（武蔵野書院、一九七七年）

〔全釈〕平野由紀子著『私家集全釈叢書3 小野篁集全釈』（風間書房、一九八八年）

〔和泉〕平林文雄・水府明徳会編著『増補改訂小野篁集・簗物語の研究 影印・資料・翻刻・校本・対訳・研究・使用文字分析・総索引』（和泉書院、二〇〇一年）

校異にあたって参照した写本は以下の通りである。【承】の影印は、『承空本私家集（上）』（冷泉家時雨亭叢書、二〇〇二年）を参照し、【書】【甲】【乙】については、前掲の（和泉）に所収の影印を参照した。

・写本

・写本

【承】承空本『小野篁集』

【書】 宮内庁書陵部蔵『小野篁集』

【甲】 水府明德会彰考館文庫蔵『篁物語』（甲本）

【乙】 水府明德会彰考館文庫蔵『篁物語』（乙本）

#### 四、注釈

以下の○1、○2などの表記は、第二節の校訂本文の行数を示している。

#### ○1 この女

篁の異母妹をさす。

#### ○1 如月の初午に、きさつがひ稲荷に参りけりはつひま いなり まい

平安時代には、二月の最初の午の日に稲荷社に参詣する慣習があつた。ここで異母妹が参詣しようとしているのは、平安京の南にある伏見稲荷大社である。

#### ○2 大人二人、おとな童二人わらは

異母妹に随行する女性たちで、「大人」は若い女房、「童」は女童めのわらわをさす。

○2 二人は同じをなむ着たりけるふたり おな

写本レベルでは、(A)「おなし」【承】【書】、(B)「おなしいろ」【甲】【乙】に分かれるが、どちらでも「同じ色」の意味であり、解釈は変わらない。

○3 君

篁の異母妹をさす。

○3 綾あやの搔練かいねりの単襲ひとへかさね

「綾」は斜線を特徴とする高級な絹織物のことである。「搔練」については、(武蔵)が「襲の色目」、(校註)(新釈)(岩波)(全釈)は素材の名としており、解釈が分かれているが、ここは「単襲」に続くので、(武蔵)の解釈に従い、搔練襲(紅色の生地 of 単衣を重ねたもの)であると解釈しておく。

なお、拙稿「『篁物語』の衣装描写「綾の搔練」についての考察——『うつほ物語』の影響から——」<sup>(7)</sup>では、「綾」かつ「搔練」を一襲(二枚)で着用していることに注目して調査を行った。その結果、史料には例がないが、『うつほ物語』にのみ三一例あり、<sup>(8)</sup>しかも、ほとんどが皇室や上流貴族の家柄の人々と上流貴族の家の使用人の着用例で、例外も富裕な豪族が用意した衣装であった。一方、篁の異母妹は中流の家の生まれであり、一張羅を着ての伏見稲荷大社参詣とも解釈できないが、ここで「綾搔練」を着ていることは不自然ではないかと指摘した。

○3 唐からの薄物うすの桜色さくらいろの細長ほそなが着て

「唐」は舶来品のこと、高級な品であることを示している。「薄物」は薄い絹織物をさす。「細長」は子供や若い女性が着る衣装の名称で、身幅が狭く、丈が長いところからこの名がついたとされる。

○3 花染はなぞめ

露草つゆくさの花の汁で染めたもの。藍色・薄桃色・桜色などに発色する。

○3 綾あやの細長ほそなが

異同はないが、細長を二枚重ねて着る例が他にないという点でこの描写は不審である。

○3 折りおてぞ着きたりける

写本レベルでは、(A)「おりて」【承】【書】、(B)「をりて」【甲】【乙】に分かれる。(A)の場合、(校註)の本文「織りて」のように漢字をあて、(武蔵)のように「綾で織った細長を着けていた」と解釈することになるが、「細長織(る)」の用例は他になく、文脈を考えてもここでわざわざ「織る」と言う必要があるのか疑問である。一方、(B)は(岩波)が「折りて」か」と指摘し、(全釈)のように「折りて」の本文を立て、「平安時代、女性の旅姿として、徒歩でゆく場合、上衣の左右の裾を折りはさんだ着方があった。「ツボヨリ」という」と解釈することになり、外出のために細長の裾を端折ったと解釈することができる。なお、「細長折(る)」も用例はないが、文脈から考えると(B)が妥当か。

○ 4 髪はうるはしくて

平安時代の美人の条件に髪的美しさがあつた。その基準は、長さや量の多さ、まっすぐであることであつた。「うるはし」は整っている、乱れない様子をさす言葉であるから、異母妹はまっすぐな髪を持っており、この点において美人の条件を備えている。

○ 4 丈に一尺ばかり余りて

異母妹の髪は身長より約三〇センチメートル長い。平安時代の文学作品で髪の高さを確認すると、身長よりも長いものは高評価が与えられており、異母妹は髪の高さでも美人の条件を満たしていると言える。

○ 4 頭つきいと清げなり

平安時代の文学作品では、女性の美しさを表現するときに、「頭つき」、つまり頭の形の美しさも問題とされる例がしばしば見られる。「清げ」は二流の美しさをさす言葉で、一流の美しさをさす「清ら」と表現するほどではないが、異母妹の頭の形は美しい感じで、「頭つき」の面でも美人の条件を備えている。

○ 6 まほにはあらねど

写本レベルでは、(A)「まほ」「承」「書」、(B)「ませ」「甲」「乙」に分かれる。(B)「ませ」は漢字をあてるなら「籬」で垣根をさし、ここでは文脈に合わない。一方、(A)「まほ」については解釈が以下の(a)～(d)の四つに分か

れる。(a) 供人が整列しているわけではないがとする(校註)(河出)、(b) 供人は正式に供をしているわけではないがとする(新釈)(武蔵)、(c) 簗が直接に付き添っていたわけではないがとする(全釈)、(d) (主語はなく) 直接つきそっていたわけではないがとする(和泉)である。ここでは、文脈から考えると、供人、または簗に限定することは難しい。前文をうけて、簗と供人たちについて言っていると解釈するのが妥当ではないだろうか。

○6 詣でまうざま

「ざま」は接尾語で、「ちょうど……する時」などの意味で用いられている。

○7 いとほしおがりて

写本レベルでは、(A)「いとおしかり」【承】【書】、(B)「いとおかしかり」【甲】【乙】に分かれる。疲れて足が進まなくなった異母妹に対する簗の感情であるから、(A)のように、「お」を「ほ」に校訂して「いとほしかり」とし、「気の毒に思って」と解釈するのは文脈に合っている。一方、(B)の「お」を「を」に校訂して「いとをかしかり」と解釈することに対して、(武蔵)は「いとおかしがりて」という彰本の本文は前後から考えて簗が「おかしかる」とは考えられない」と指摘しているが、『枕草子』で、若い女性が齒の痛みに苦しんでいる様子を「いとをかしけれ」(八一段「病は」三二八頁)<sup>9)</sup>と言っているように、若く美しい女性が苦しむ姿に「をかし」という感情を抱くことも全くないとは言えない。しかし、ここでは、底本を尊重し(A)の本文で解釈を行う。



○7 いらないな

否定の意味の「いな」を重ねて強調した表現になっている。

○8 道中に居にけり

写本レベルでは、(A)「ゐにけり」【承】【書】、(B)「いにけり」【甲】【乙】に分かれる。(A)の場合、路上に座り込んでしまったの意味になる。<sup>⑩</sup>一方、(B)の場合、(全釈)のように「道の真中へ行ってしまった」と解釈することになる。<sup>⑪</sup>ここは、次の場面で「女のみちにゐたる」(写本レベルで異同ナシ)とところに通りがかった兵衛佐が、異母妹に同情していることを考えると、(A)の本文、解釈が妥当ではないだろうか。

## 五、現代語訳

第四節の注釈を踏まえて、承空本にできるだけ忠実に訳したものが、以下の現代語訳である。番号は第二節に示した本文の行数を示している。

1 さて、この女(簗の異母妹)は、神仏に祈願することがあって、二月の初午に、伏見稲荷大社に参詣した。供には人が多くもなく、

2 女房二人、童女二人がいた。女房はそれぞれ色の異なる桂、童女二人は同じ色のものを着ていた。

3 女君(簗の異母妹)は、綾織の搔練の単襲、舶来の薄い絹織物の桜色の細長を着て、花染の綾織の細長を折って

4 着ていた。髪は整っていて美しくて、身長に三〇センチほど余って、頭の形がとても綺麗な感じである。

5 顔も不思議と世の中の人には似ず、すばらしかった。(異母妹の一行のそばには) 童子が三四人、それ以外にはこの

6 兄(簗)がいた。直接(供をするわけ)ではないけれど、(簗と童子たちは)先立ったり後れたりして(異母妹らについて)来た。(異母妹は)ちょうど参詣する時に、疲れ

7 てしまったので、兄(簗)は気の毒に思っ、「簗に寄りかかりなさいませ」と言っ近づいたところ、(異母妹は)「いや、い

8 えいえ」と言っ、道の真ん中に座りこんでしまった。

## 六、まとめ

本稿では、承空本『小野篁集』の、稲荷詣での場面の冒頭部分について、先行論を踏まえて注釈をほどこし、現代語訳を行ってきた。

その作業の過程で見つかった、解釈に相違が出るような本文異同は以下の四例(傍線部)で、これらはすべて、【書】の本文、【甲】【乙】の本文がそれぞれ一致していた。

○3 折りてぞ着たりける

○6 まほ

○7 いとほしが<sup>お</sup>りて

○8 道中<sup>みち</sup>に居<sup>ゐ</sup>にけり

これらのうち、○3は【甲】【乙】のほうが妥当、○6と○8は【承】【書】のほうが妥当であった。なお、○7については【承】【書】、【甲】【乙】それぞれで解釈できるが、底本を尊重して【承】【書】で解釈した例<sup>12)</sup>である。

承空本の位置づけを考える上では、今後より広範囲にわたって他の写本の本文との相違を分析する必要がある。残りの部分についても、順次、作業を進めていく所存である。

### (注)

(1) 成立時期について、筆者は「角筆」「搔練」などの言葉を手がかりに、『篁物語』の成立時期を平安後期(一二世紀末)～平安末期(一二世紀末)の約一〇〇年の間ではないかと推定している。詳しくは、拙稿『『篁物語』成立年代再考——「角筆」を手がかりとして——』、『篁物語』の総合的研究(1)』(『国士館人文学』第七号「通卷四九号」、二〇一七年三月)、『『篁物語』成立年代再考(2)——「搔練」を手がかりとして——』、『篁物語』の総合的研究(2)』(同・第八号「通卷五〇号」、二〇一八年三月)を参照。

(2) 鎌倉時代後期の浄土宗西山派の僧侶、玄観房承空が筆写した写本のこと。承空は冷泉家とは遠縁にあたり、写本は現在、公益財団法人冷泉家時雨亭文庫に保管されている。承空の詳しい来歴については仁藤智子「歌僧・承空の基礎的考察——『篁物語』書写の歴史的背景——」(『国士館人文学』第九号「通卷五一号」、二〇一九年三月)を参照。

- (3) 拙稿「承空本『小野篁集』注釈の試み(1)―篁と異母妹の出会い―」(『国士館人文学』第一二号「通卷五四号」、二〇二二年三月)。
- (4) 拙稿「承空本『小野篁集』注釈の試み(2)―篁と異母妹の出会い(後半)・師走の月夜の場面―」(『国士館人文学』第一三号「通卷五五号」、二〇二三年三月)。
- (5) 拙稿「承空本『小野篁集』注釈の試み(3)―漢籍教授に身が入らない篁の場面―」(『国士館人文学』第一四号「通卷五六号」、二〇二四年三月)。
- (6) 中村一夫「承空筆『小野篁集』による校訂本文作成の試み」(『国士館人文学』第八号「通卷五〇号」、二〇一八年三月)。
- (7) 拙稿「『篁物語』の衣装描写「綾の搔練」についての考察―『うつほ物語』の影響から―」(『国士館人文学』第一号「通卷五三号」、二〇二二年三月)。
- (8) 用例の検索にはジャパンナレッジ所収の『新編日本古典文学全集』を使用し、「中古」に限定して調査を行った。以下、用例調査は同様に行った。
- (9) 松尾聰・永井和子(校注・訳)『新編日本古典文学全集 枕草子』(小学館、一九九七年)
- (10) (和泉)は「路傍に坐りこんでしまった」と解釈している。(和泉)は「路傍」を「路上」という意味で使っているのかもしれないが、「路傍」は「みちのほとり。みちばた。」(小学館国語辞典編集部編集『日本国語大辞典』第二版「小学館、二〇〇〇～二〇〇二年」という意味であり、「道の端」をさすこともあることから、誤解をうむ可能性がある言葉であり、本稿では、ここは「路傍」ではなく「路上」として解釈する。
- (11) (武威)は「道中を歩いて行った」と解釈するが、これは本文に忠実な解釈ではない。

(12) 前述の〇7「いとほし<sup>お</sup>かりて」の項目を参照。

〔キーワード〕 小野篁 小野篁集 篁物語 承空本